

- JFUNU STUDY TOUR 2018
- キッコーマン株式会社訪問
- 広島平和記念公園訪問
- 森本鐵鋼産業株式会社訪問
- UNU-IAS学生インタビュー

## -JFUNU STUDY TOUR 2018-

国連大学協会では、国連大学サステナビリティ高等研究所大学院プログラムで学ぶ学生や研究者を対象に、日本の魅力を紹介するJFUNU Study Tourを年に数回実施しています。2018年はキッコーマン株式会社、広島平和記念公園、そして森本鐵鋼産業株式会社を訪れました。



### 食卓から世界を笑顔に。-キッコーマン株式会社訪問

2018年2月14日、千葉県野田市にあるキッコーマンもの知りしょうゆ館を訪れました。まずはしょうゆ醸造体験教室を受講。「なあにちゃん」の赤いエプロンを身に着け気分十分、原料の大豆からしょうゆができるまでを学びました。ランチに特製の「しょうゆもろみ弁当」をごちそうになった後、館内の施設を見学し、実際にしょうゆが製造されている工場の一部と伝統製法を守る御用蔵を見学しました。一日を通じて、キッコーマンの食品づくりへのこだわりと、しょうゆを通じて社会とのかかわりを大切にする文化を学びました。

#### 甘さをひきたてる？しょうゆの思わぬ効用にビックリ

「どうぞ召し上がれ〜」キッコーマンから振舞われたのは、「しょうゆソフトクリーム」。「しょうゆといえばお寿司。甘味のイメージはないけど、どんな味だろう？」と恐る恐る口に運ぶ学生たちでした。いざ一口食べてみるとビックリ！「キャラメルアイスみたいで美味しい！」と皆大絶賛。あまりの美味しさとここでしか味わえないレアものとの出会いに、多くの学生が「お土産！」ともうひとつ買い込んで帰りのバスの中で頬張り大満足。心残りなくキッコーマンを後にしました。



### 平和な世界を。-広島平和記念公園訪問

2018年6月27日、7月に卒業を控えた学生9名が広島を訪れました。通訳ボランティアの方によるガイドで原爆ドームや広島平和記念公園、爆心地となった島病院などを訪れ原爆の痕跡をたどりました。また、行きの新幹線で折り鶴に挑戦。悪戦苦闘しながらも完成させた千羽鶴を原爆の子の像にお供えしました。その後広島平和記念資料館内を見学し、被爆体験者から証言を聞きました。

#### 学生が感じた「ヒロシマ」

「広島を訪れ、原爆の被害の大きさとその残酷さに衝撃を受けました。原爆投下後の時代を生き延びた人が社会からの偏見や後遺症に長きにわたり悩まされてきたという事を初めて知りました。祖国に帰り、子供たちや自身のコミュニティに、平和の尊さを伝えていきたいと思います。」  
—Jさん エチオピア出身  
「壊滅的な被害を受けた広島をここまで美しい街に復興させたということは驚くべきことだと思いました。私の国でも内紛が度々ありますが、暴力によっては何も解決しないこと、平和的な方法によって紛争を解決すべきだと強く感じました。」

—Nさん ジンバブエ出身



### 持続可能な社会へ挑戦！企業と社会インフラの役割—森本鐵鋼産業株式会社訪問

2018年11月9日、板橋区にある森本鐵鋼産業株式会社を訪問しました。昭和35年に創業して以来、金属リサイクル業を営んできたという森本鐵鋼。持続可能な開発目標(SDGs)に高い関心を持ち、環境汚染の原因になる産業廃棄物の処理には特に配慮を行うなど、環境に優しいリサイクル事業を実現する他、「できることからSDGsに取り組みたい」と社内のダイバーシティ化を進めたり、女性社員が働きやすい職場環境を整えたり、様々な取り組みを行っていることが紹介されました。また東京都下水道局新河岸水再生センターを見学し、快適な日常生活がどのように支えられているのか学ぶとともに、区内の産業が一堂に会した、「いたばし産業見本市」にも参加し、板橋区が世界に誇るものづくりに触れました。

#### 「ド————ン」という振動の正体は

ヘルメットと軍手を装着し、いざ工場の見学へ。特別に金属を加工する現場を見せていただきました。工場に近づくと「ド————ン」と振動が体にひびきます。「じ、地震か？」と思いきや、その正体は、マグネットのついた巨大なクレーン。鉄スクラップの積み下ろしや加工機械への投入は人の手ではなく、クレーンで行われるそうです。初めて見るリサイクル現場の迫力に学生たちは圧倒されていました。

# 特集 UNU-IAS学生インタビュー



Albert Novas Somanje  
UNU-IAS博士課程2年  
ザンビア出身

## アフリカ諸国に重くのしかかる都市化と貧困の課題

まず、アフリカ諸国が抱える課題について少しお話したいと思います。

近年アフリカ諸国の人口は急速に増加すると同時に、農村に比べて都市の人口が著しく増える「都市化」が進んでいます。すでにアフリカ諸国では食糧安全保障の問題に頭を悩ませており、その上に人口増加と都市化による食糧難がふりかかるとなると、食料の調達も喫緊の課題です。

気候変動により農地が痩せ、地方での生活が苦しくなると、農民は都市への移住を試みます。ただ、地方を出て都市に來ても職がないため、スラム街が形成されます。技術を身に付ける教育を受ける経済的余裕もないため、再就職は難しく、貧困から抜け出せないという悪循環に陥ります。また、地方で食物を生産しても、都市を結ぶインフラが整備されておらず、都市に流通させることができないというハード面の課題もあります。これら一つ一つがSDGs(持続可能な開発目標)が2030年までに取り組むべきとした課題でもあります。

## 農業へのアプローチ、可能性は無限

私は国連大学の博士課程で、こうした地方と都市のつながり“urban-rural linkages”に着目し、特に農家への教育によるアプローチ“Agriculture Extension(農業拡張)”について研究しています。Agriculture Extensionの大まかな構図としては、まず地方の農家に職業訓練の機会を提供し、農産物の生産効率を高める技術や知識を提供します。これらの教育を受けることで、農家は持続可能な生産活動を営むことができるようになり、また、気候変動に柔軟に対応した生産活動を行うことができるようになります。これらは農家を貧困から救うことにつながります。

また、農作面積が増えれば、緑化につながり、痩せた土地がうるおい、地球温暖化と気候変動の歯止めにも貢献します。また、ザンビアは農業大国なので、農業が発展すれば国の経済成長にもつながります。適切にAgriculture Extensionを行うことで、先ほど述べた人口拡大や都市化に伴いアフリカ諸国が抱える数々の課題にアプローチすることができ、また同時に数多くのSDGsの達成に貢献すると考えています。

国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)大学院プログラムでは、世界各国から学生が集い、地球規模課題の解決の為、日々勉強や研究に励んでいます。今回は、国連大学協力が提供するjfScholarship奨学金のうち、トヨタ自動車株式会社がスポンサーとなっている冠奨学金「Toyota Scholarship」を受給し国連大学で学ぶUNU-IAS博士課程2年のAlbertさんに、大学院での研究や日本での生活について話をききました。

## Agriculture Extensionの難しさ

とはいえ、農家に学ぶ機会を提供すれば全て解決するかといえば、そう一筋縄に行くものではありません。そこで、鍵となるのが効率性です。例えば、気候変動に伴い、雨が降らず川の水が干上がってしまったとします。そのような場合でも絶えず農家に水を提供できるように、効率的な水資源の管理方法を考えなければなりません。また、森林破壊に歯止めをかけるため、耕作面積を増やすために森林を切り倒すのではなく、限られた土地で生産効率を上げる工夫が必要です。また、地方に住む人々の中には、字が読め、自ら学ぶ機会を求めることのできる農家もありますが、ザンビアの識字率は比較的低いため、まだまだ政府の助けが必要な農家がたくさんあると考えています。

## 国連大学でしか学べない、実務に直結する応用科学

国連大学の良いところは、理論をただ学ぶにとどまらず、応用科学をより重視しているところです。応用化学は実務で政策を練る際に非常に役に立つものです。国連大学の大学院は学生数が博士課程と修士課程併せても数十人と少人数です。応用化学はより集中できる環境を求められるので、指導教授とのやりとりを密にとれることは非常に利があることだとおもいます。

## 奨学金がなければ叶わなかった、博士課程進学への夢

世界の多くの国では中央政府の奨学金を利用し国費留学をすることが可能だとおもいますが、ザンビアではかありませんでした。予算の配分は地方政府に一任されていますが、残念ながら私の取り組むAgriculture Extensionは優先順位の低い分野です。特に、人材育成に割く余裕がなく、複数年にわたる博士課程の留学奨学金を出すことは極めて難しいのが現状でした。なので、奨学金がなければ、まず留学は不可能でした。トヨタ自動車がスポンサーとなって支援してくださなければ、私は今日国連大学で勉強することはできませんでした。トヨタ自動車には、非常に感謝をしています。私は卒業後、母国ザンビアの環境省に戻り、国の仕組みづくりに関わるなかで、国連大学で学んだことを母国ザンビアに還元していきたいと思えます。奨学金は決して私一人のためのものではなく、ザンビアの国全体に利をもたらすものです。ザンビア国民に代わり、お礼を申し上げます。支えてくださり、ありがとうございます。

## ザンビアってどんな国？



アフリカ大陸の南部に位置し、8つの国に囲まれた内陸国。首都はルサカ。73の部族が住む多様性を持ち、また独立以来、戦争や内乱がない平和な国。またコバルトや銅など鉱物資源に恵まれている。雄大なザンベジ川、世界三大瀑布ビクトリアの滝をはじめ、広大な草原や湖など壮大な大自然が残る。

## 日本での生活はどのようなですか？

研究が大変なことを除いては、特に日常生活で困ることはありません。研究は大変です。集中しなければなりません。海外の他の大学では通常博士号をとるのに5年かかるころ、国連大学ではそれを3年でやっしまわうわけですから、非常にコンパクトなプログラムだと思います。一分一秒が貴重です。奨学金をいただいているのですが、東京は物価が高いので、自己管理が求められます。贅沢はせず、身の丈に合った生活を心がけています。国連大学の学内公用語は英語なので、不自由しませんが、大学を一步出ると日本語しか通じません。苦勞することもあります。新しい言語を学べるよい機会だとポジティブに考えています。異文化体験といえば、そうですね。金曜の終電を除けば、日本の電車は誰もいないかのようにとても静かですね。食べ物については、魚が多いですね。(ザンビアは四方を隣国に囲まれた内陸国)魚アレルギーなので、お出汁など調味料に気を使います。日本語も覚えながら、なんとか頑張っていますよ。

## 国連大学の学生を応援しませんか？

国連大学ではAlbertさんの他にも、世界各国から優秀な学生が集い、日々勉強に励んでいます。国連大学協力は、皆さまのご支援のもと、Albertさんのように「世界をよりよくしたい！」と大志を抱く途上国出身の学生にjfScholarship奨学金を提供しています。みなさんも一緒に応援しませんか？詳しくは国連大学協会事務局へお尋ねください。